

次号では、釈迦三大聖地巡りの思い出です）

題材法話

○ 帰命無量寿如来 南無不思議光

正信偈の最初の二句は帰
敬序とよび、正信偈の全
が集約されているといっ
も過言ではありません。
「無量寿如来に帰命し、不
可思議光に南無したてまつ
る」と読みますが、無量寿
如来も不思議光も、ともに
に阿彌陀様の呼び名であり
ます。そして、「帰命」も
「南無」も、全く同じ意味
で、ともにまかせるという
意味です。
蓮如上人が御文章に「南
無の二字は帰命のころな
り。帰命といふは、もろも
ろの雑行をすて、阿彌陀
仏の生たすけたまえと一
にたのみたてまつるころ
なるべし。」と仰られてま
すが、南無も帰命も阿彌陀
様にすべてを任せてたの
ということですよ。

○ 「たのむ」のころ

そこでの「たのむ」と
いう意味を少しわけてみ
ます。現在の使われている
「たのむ」という言葉は、
通常、人にものを依頼する
時に使いますが、この場合
必ずしも相手は私のことを
考えているとは限りません
し、必ず引き受けてくれる
とは限らない場合にも使
ます。むしろ、その使いか
たの方が多いかも知れま
せん。
「たのむ」という日本語は、
「頼る」という意味で、相
託すことのできる時に全
言葉なので、例えば、お
ばあちゃんや、お兄ちゃん
行こうとしたり、お兄ちゃん
お孫さんが、お兄ちゃん
い孫さんが、お兄ちゃん
ぼくが、お兄ちゃん
や。お兄ちゃん
その。お兄ちゃん
す。お兄ちゃん
の。お兄ちゃん
け。お兄ちゃん
け。お兄ちゃん

また、「本当にポストに
入れてくれるだろうか？」
なんて少しも疑う必要がな
いのです。全てを任せきれ
る。これが「たのむ」のこ
ろ。浄土真宗の「たのむ」
の方から願うのではなく、私
の任せよ」という阿彌陀さ
まの呼びかけに、「お任せ
します」と返事することな
のであります。
○ 阿彌陀様のはたらき
「つぎに「無量寿如来」も
「不可思議光」も、ともに
阿彌陀様の呼び名ですが、
深い阿彌陀様の働きをあら
わしている。無量寿とは「限
いのち」と「不可思議光」と
い計り知れない場所という
意味です。仏さまの働きとい
う例えは親鸞聖人の時代の
人は救われても、今の世の
人は救われないで救われて
す。また日本では救われて
というのダメです。

嬉しいときも悲しいとき
も、寂しい夜道でも賑やか
な人混みの中でも、日本で
も外国でも、昼でも夜明け
でも、とにかくどこにいて
もどんなことをしていても
私の前に現前とおつてくだ
さる。それが阿彌陀様なの
です。
○ 親鸞様の歓喜の声
親鸞様は仏になるための
道を、9歳から29歳までの
20年間、比叡山においで
て命がけで求め続けられま
した。
（まよい）出づるべき道」を
見つけることができず、悲
嘆のどん底にあるとき、法
然上人との出会いの中で
念仏のみ教えに逢われまし
た。その呼び声でしよ。こ
せよとの呼び声でしよ。こ
どんなに大きなよ。こ
であつたことだしよ。こ
でその歓喜の声が、「帰命
無量寿如来」南無不思議
光」なのです。
1月31日例会
住職法話より（前号のつづき）

